

-----  
【テキスト中に現れる記号について】

《 》：ルビ  
(例) 父の仇《あだ》

|：ルビの付く文字列の始まりを特定する記号  
(例) 当時|文蔵《ぶんぞう》と云う

[ # ]：入力者注 主に外字の説明や、傍点の位置の指定  
(例) [ #地から1字上げ ] (大正十二年十二月)

-----

これは孝子伝吉の父の仇《あだ》を打った話である。

伝吉は信州《しんしゅう》水内郡《みのちごおり》笹山《ささやま》村の百姓の一人息子《ひとりむすこ》である。伝吉の父は伝三と云い、「酒を好み、博奕《ばくち》を好み、喧嘩《けんか》口論を好んだと云うから、まず一村《いっそん》の人々にはならずもの扱いをされていたらしい。(註一)母は伝吉を産《う》んだ翌年、病死してしまったと云うものもある。あるいはまた情夫《じょうふ》の出来たために出奔してしまったと云うものもある。(註二)しかし事実はどちらにしろ、この話の始まる頃にはいなくなっていたのに違いない。

この話の始まりは伝吉のやっとなつて十二歳になった(一説によれば十五歳)天保《てんぽう》七年の春である。伝吉はある日ふとしたことから、「越後浪人《えちごろうにん》服部平四郎《はっとりへいしろう》と云えるものの怒《いかり》を買い、あわや斬《き》りも捨てられん」とした。平四郎は当時|文蔵《ぶんぞう》と云う、柏原《かしわばら》の博徒《ばくと》のもとに用心棒をしていた剣客《けんかく》である。もっともこの「ふとしたこと」には二つ三《み》つ異説のない訣《わけ》でもない。

まず田代玄甫《たしろげんぽ》の書いた「旅硯《たびすずり》」の中の文によれば、伝吉は平四郎の鬻《まげ》ぶしへ唄《たこ》をひっかけたと云うことである。

なおまた伝吉の墓のある笹山村の慈照寺《じしょうじ》(浄土宗《じょうどしゅう》)は「孝子伝吉物語」と云う木版の小冊子《しょうさっし》を頒《わか》っている。この「伝吉物語」によれば伝吉は何もした訣ではない。ただその釣《つり》をしている所へ偶然来かかった平四郎に釣道具を奪われようとしただけである。

最後に小泉孤松《こいずみこしょう》の書いた「農家《のうか》義人伝《ぎじんでん》」の中的一篇によれば、平四郎は伝吉の牽《ひ》いていた馬に泥田《どろた》へ蹴落《けおと》されたと云うことである。(註三)

とにかく平四郎は腹立ちまぎれに伝吉へ斬りかけたのに違いない。伝吉は平四郎に追われながら、父のいる山畠《やまばた》へ逃げのぼった。父の伝三はたった一人《ひとり》山畠の桑の手入れをしていた。が、子供の危急《ききゅう》を知ると、芋《いも》の穴の中へ伝吉を隠した。芋の穴と云うのは芋を囲《かこ》う一畳敷ばかりの土室《つちむろ》である。伝吉はその穴の中に俵の藁《わら》をかぶったまま、じっと息をひそめていた。

「平四郎たちまち追い至り、『老爺《おやじ》、老爺、小僧はどちへ行ったぞ』と尋ねけるに、伝三もとよりしたたかものなりければ、『あの道を走り行き候』とぞ欺《あざむ》きける。平四郎その方《ほう》へ追ひ行かんとせしが、ふと伝三の舌を吐《は》きたるを見咎《みとが》め、『土百姓《どびやくしょう》めが、大胆《だいたん》にも  
(虫食いのために読み難し)とて伝三を足蹴《あしげ》にかけければ、不敵の伝三腹を据《す》え兼ね、あり合う鎌《くわ》をとるより早く、いざさらば土百姓の腕を見せんとぞ息まきける。

「いづれ劣らぬ曲者《くせもの》ゆえ、しばく(シの誤か)は必死に打ち合いけるが、.....

「平四郎さすがに手だれなりければ、思うままに伝三を疲らせつつ、打ちかくる鎌を引きはずすと見る間《ま》に、伝三の肩さきへ一太刀《ひとたち》浴びせ、.....

「逃げんとするを逃がしもやらず、拝《おが》み打ちに打ち放し、.....

「伝吉のありかには気づかずありけん、悠々と刀など押し拭い、いずこともなく立ち去りけり。」(旅硯《たびすずり》)

脳貧血《のうひんけつ》を起した伝吉のやっとなつて穴の外へ這《は》い出した時には、もうただ芽をふいた桑の根がたに伝三の死骸《しがい》のあるばかりだった。伝吉は死骸にとりすがったなり、いつまでも一人じっとしていたが、涙は不思議にも全然|睫毛《まつげ》を沾《うるお》さなかった。その代りにある感情の火のように心を焦《こ》がすのを感じた。それは父を見殺しにした彼自身に対する怒だった。理が非でも仇《あだ》を返さなければ消えることを知らない怒だった。

その後《ご》の伝吉の一生はほとんどこの怒のために終始したと云ってもよい。伝吉は父を葬《ほうむ》った後《のち》、長窪《ながくぼ》にいる叔父《おじ》のもとに下男《げなん》同様に住みこむことになった。叔父は枳屋善作《ますやぜんさく》（一説によれば善兵衛《ぜんべえ》）と云う、才覚《さいかく》の利《き》いた旅籠屋《はたごや》である。（註四）伝吉は下男部屋に起臥《きが》しながら仇打《あだう》ちの工夫《くふう》を凝《こ》らしつづけた。この仇打の工夫についても、諸説のいずれが正しいかはしばらく疑問に附するほかはない。

（一）「旅硯」、「農家義人伝」等によれば、伝吉は仇の誰であるかを知っていたことになっている。しかし「伝吉物語」によれば、服部平四郎《はっとりへいしろう》の名を知るまでに「三 | 星霜《せいそう》を閲《けみ》し」たらしい。なおまた皆川鯛庵《みながわちょうあん》の書いた「木《こ》の葉《は》」の中の「伝吉がこと」も「数年を経たり」と断《ことわ》っている。

（二）「農家義人伝」、「本朝《ほんちょう》姑妄聴《こもうちょう》」（著者不明）等によれば、伝吉の剣法《けんぼう》を学んだ師匠は平井左門《ひらいさもん》と云う浪人《ろうにん》である。左門は長窪の子供たちに読書や習字を教えながら、請うものには北辰夢想流《ほくしんむそうりゅう》の剣法も教えていたらしい。けれども「伝吉物語」「旅硯」「木の葉」等によれば、伝吉は剣法を自得《じとく》したのである。「あるいは立ち木を譬《かたき》と呼び、あるいは岩を平四郎と名づけ」、一心に練磨《れんま》を積んだのである。

すると天保《てんぼう》十年頃意外にも服部平四郎は突然 | 往《ゆ》くえを晦《くら》ましてしまった。もっともこれは伝吉につけ狙《ねら》われていることを知ったからではない。ただあらゆる浮浪人のようにどこかへ姿を隠してしまっただけである。伝吉は勿論 | 落胆《らくたん》した。一時は「神ほとけも譬《かたき》の上を守らせ給うか」とさえ歎息した。この上 | 仇《あだ》を返そうとすればまず旅に出なければならない。しかし当てもない旅に出るのは現在の伝吉には不可能である。伝吉は烈しい絶望の余り、だんだん遊蕩《ゆうとう》《ゆうとう》に染まり出した。「農家義人伝」はこの変化を「交《まじわり》を博徒《ばくと》に求む、蓋《けだ》し譬《かたき》の所在を知らんと欲する也」と説明している。これもまたあるいは一解釈かも知れない。

伝吉はたちまち枳屋《ますや》を逐《お》われ、唐丸《とうまる》の松《まつ》と称された博徒 | 松五郎《まつごろう》の乾児《こぶん》になった。爾来《じらい》ほとんど二十年ばかりは無頼《ぶらい》の生活を送っていたらしい。（註五）「木《こ》の葉《は》」はこの間《あいだ》に伝吉の枳屋の娘を誘拐《ゆうかい》したり、長窪《ながくぼ》の本陣《ほんじん》何某へ強請《ゆすり》に行ったりしたことを伝えている。これも他の諸書に載せてないのを見れば、軽々《けいけい》に真偽《しんぎ》を決することは出来ない。現に「農家義人伝」は「伝吉、一郷《いっきょう》の悪少《あくしょう》と共に屡《しばしば》横逆《おうげき》を行えりと云う。妄誕《もうたん》もつたんと弁ずるに足らざる也。伝吉は父譬《ふしゅう》を復せんとするの孝子、豈《あに》、這般《しゃはん》の無状《ぶじょう》あらんや」と「木の葉」の記事を否定している。けれども伝吉はこの間も仇打ちの一念は忘れなかったのであろう。比較的伝吉に同情を持たない皆川鯛庵《みながわちょうあん》さえこう書いている。「伝吉は朋輩《ほうばい》どもには仇あることを云わず、仇あることを知りしものには自《みづか》らも仇の名など知らざるように装《よそお》いしとなり。深志《しんし》あるものの所作《しょさ》なるべし。」が、歳月は徒《いたず》らに去り、平四郎の往くえは不相変《あいかわらず》誰の耳にもはいらなかった。

すると安政《あんせい》六年の秋、伝吉はふと平四郎の倉井《くらい》村にいたことを発見した。もっとも今度は昔のように両刀を手挟《たばさ》んでいたのではない。いつか髪《かみ》を落した後《のち》、倉井村の地藏堂《じぞうどう》の堂守《どうもり》になっていたのである。伝吉は「冥助《みょうじょ》のかたじけなさ」を感じた。倉井村と云えば長窪から五里に足りない山村《さんそん》である。その上 | 笹山《ささやま》村に隣《とな》り合っているから、小径《こみち》も知らないのは一つもない。（地図参照）伝吉は現在平四郎の浄観《じょうかん》と云っているのも確かめた上、安政六年九月 | 七日《なのか》、菅笠《すががさ》をかぶり、旅合羽《たびがっぱ》を着、相州無銘《そうしゅうむめい》の長脇差《ながわきざし》をさし、たった一人仇打ちの途《と》に上《のぼ》った。父の伝三の打たれた年からやっと二十三年目に本懐《ほんかい》を遂げようとするのである。

伝吉の倉井村へはいったのは戌《いぬ》の刻《こく》を少し過ぎた頃だった。これは邪魔《じゃま》のはいらないためにわざと夜を選んだからである。伝吉は夜寒《よさむ》の田舎道《いなかみち》を山のかげにある地藏堂へ行った。窓障子《まどしょうじ》の破れから覗《のぞ》いて見ると、櫓明《ぼたあか》りに照された壁の上に大きい影が一つ映《うつ》っていた。しかし影の持主は覗《のぞ》いている角度の関係上、どうしても見ることは出来なかった。ただその大きい目前《もくぜん》の影は疑う余地のない坊主頭《ぼうずあたま》だった。のみならずしばらく聞き澄ましていても、この佗《わび》しい堂守《どうもり》のほかには人のいるけはいは聞えなかった。伝吉はまず雨落《あまお》ちの石へそっと菅笠《すががさ》を仰向《あおむ》けに載せた。それから静かに旅合羽《たびがっぱ》を脱ぎ、二つに畳《たた》んだのを笠の中に入れた。笠も合羽もいつの間《ま》にかしっとりと夜露《よつゆ》にしめっていた。すると、急に便通を感じた。伝吉はやむを得ず藪《やぶ》かげへはいり、漆《うるし》の木の下《した》へ用を足した。この一条を田代玄甫《たしろげんぽ》は「胆《きも》の太きこそ恐ろしけれ」と称《たた》え、小泉孤松《こいずみこしょう》は「伝吉の沈勇、極まれり矣《い》」と嘆じている。

身仕度《みじたく》を整えた伝吉は長脇差《ながわきざし》を引き抜いた後《のち》、がらりと地蔵堂の門障子《かどしょうじ》をあけた。囲炉裡《いろり》の前には坊主が一人、楽々《らくらく》と足を投げ出していた。坊主はこちらへ背を見せたまま、「誰じゃい？」とただ声をかけた。伝吉はちょっと拍子抜《ひょうしぬ》けを感じた。第一にこう云う坊主の態度は仇《あだ》を持つ人とも思われなかった。第二にその後ろ姿は伝吉の心に描《えが》いていたよりもずっと憔悴《しょうすい》を極めていた。伝吉はほとんど一瞬間人違いではないかと思う疑いさえ抱いた。しかしもう今となってはためらってはいられないのは勿論だった。

伝吉は後《うし》ろ手に障子をしめ、「服部平四郎《はっとりへいしろう》」と声をかけた。坊主はそれでも驚きもせず、不審《ふしん》そうに客を振り返った。が、白刃《しらば》の光りを見ると、咄嗟《とっさ》に法衣《ころも》の膝《ひざ》を起した。樺火《ほたび》に照らされた坊主の顔は骨と皮ばかりになった老人だった。しかし伝吉はその顔のどこかにはっきりと服部平四郎を感じた。

「誰じゃい、おぬしは？」

「伝三の倅《せがれ》の伝吉だ。怨《うら》みはおぬしの身に覚えがあるだろう。」

浄観《じょうかん》は大きい目をしたまま、黙然《もくねん》とただ伝吉を見上げた。その顔に現れた感情は何とも云われない恐怖《きょうふ》だった。伝吉は刀を構えながら、冷やかにこの恐怖を享樂した。

「さあ、その伝三の仇《あだ》を返しに来たのだ。さっさと立ち上って勝負をしろ。」

「何、立ち上れじゃ？」

浄観は見見る微笑《びしょう》を浮べた。伝吉はこの微笑の中に何か妙に凄《すご》いものを感じた。

「おぬしは己《おれ》が昔のように立ち上れると思っているのか？ 己は居《い》ざりじゃ。腰抜けじゃ。」

伝吉は思わず一足《ひとあし》すさった。いつか彼の構えた刀はぶるぶる切先《きっさき》を震《ふる》わしていた。浄観はその容子《ようす》を見やったなり、齒の抜けた口をあからさまにもう一度こうつけ加えた。

「立ち居さえ自由にはならぬ体じゃ。」

「嘘《うそ》をつけ。嘘を……」

伝吉は必死に罵《ののし》りかけた。が、浄観は反対に少しずつ冷静に返り出した。

「何が嘘じゃ？ この村のものにも聞いて見るが好《よ》い。己は去年の大患《おおわずら》いから腰ぬけになっただけじゃ。じゃが、」

浄観はちょっと言葉を切ると、まともに伝吉の目の中を見つめた。

「じゃが己《おれ》は卑怯《ひきょう》なことは云わぬ。いかにもおぬしの云う通り、おぬしの父親《てておや》は己の手にかけた。この腰抜けでも打つと云うなら、立派《りっぱ》に己は打たれてやる。」

伝吉は短い沈黙の間《あいだ》にいろいろの感情の群《むら》がるのを感じた。嫌悪《けんお》、憐憫《れんびん》、侮蔑《ぶべつ》、恐怖、そう云う感情の高低《こうてい》は徒《いたずら》に彼の太刀先《たちさき》を鈍《にぶ》らせる役に立つばかりだった。伝吉は浄観を睨《にら》んだぎり、打とうか打つまいかと逡巡《しゅんじゅん》していた。

「さあ、打て。」

浄観はほとんど傲然《ごうぜん》と斜《ななめ》に伝吉へ肩を示した。その拍子《ひょうし》にふと伝吉は酒臭い浄観の息を感じた。と同時に昔の怒のむらむらと心に燃え上るのを感じた。それは父を見殺しにした彼自身に対する怒だった。理が非でも仇《あだ》を打たなければ消えることを知らない怒だった。伝吉は武者震《むしやぶる》いをするが早いか、いきなり浄観を袈裟《けさ》がけに斬った。……

伝吉の見事に仇を打った話はたちまち一郷《いちごう》の評判になった。公儀《こうぎ》も勿論この孝子には格別の咎《とが》めを加えなかったらしい。もっとも予《あらかじ》め仇打ちの願書《がんしょ》を奉ることを忘れていたから、褒美《ほうび》の沙汰《さた》だけはなかったようである。その後《ご》の伝吉を語ることは生憎《あいにく》この話の主題ではない。が、大体を明かにすれば、伝吉は維新《いしん》後材木商を営み、失敗に失敗を重ねた揚句《あげく》、とうとう精神に異状を来した。死んだのは明治《めいじ》十年の秋、行年《ぎょうねん》はちょうど五十三である。（註六）しかしこう云う最期《さいご》のことなどは全然諸書に伝わっていない。現に「孝子伝吉物語」は下《しも》のように話を結んでいる。

「伝吉はその後《のち》家富み栄え、楽しい晩年を送りました。積善《せきぜん》の家に余慶《よけい》ありとは誠にこの事でありましょう。南無阿弥陀仏《なむあみだぶつ》。南無阿弥陀仏《なむあみだぶつ》。」

[ # 地から1字上げ ] (大正十二年十二月)

底本：「芥川龍之介全集5」ちくま文庫、筑摩書房

1987（昭和62）年2月24日第1刷発行

1995（平成7）年4月10日第6刷発行

底本の親本：「筑摩全集類聚版芥川龍之介全集」筑摩書房

1971（昭和46）年3月～1971（昭和46）年11月

入力：j.utiyama

校正：かとうかおり

1999年1月8日公開

2004年3月7日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。